

# Poole(2011): Chapter7 Further Exercises

荒木 理求

23120086@ed.tmu.ac.jp

2025年12月23日

## 1 Exercise 1

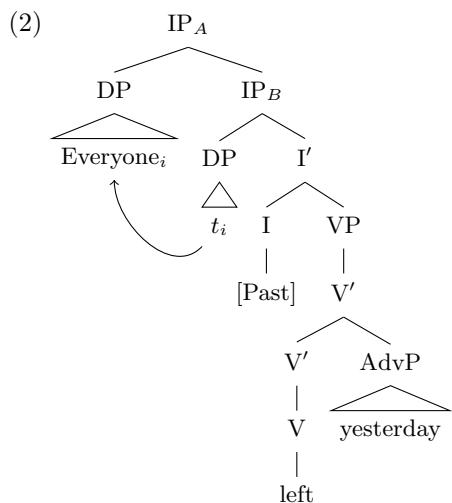


以下の文の LF 表示をかけ :

1. Everyone left yesterday.
2. John said that Bill believed some politician.
3. Zhangsan xiangzin [shei mai-le shu]?[Chinese]  
Zhangsan believe who bought book  
'Who does Zhangsan believe bought books?'

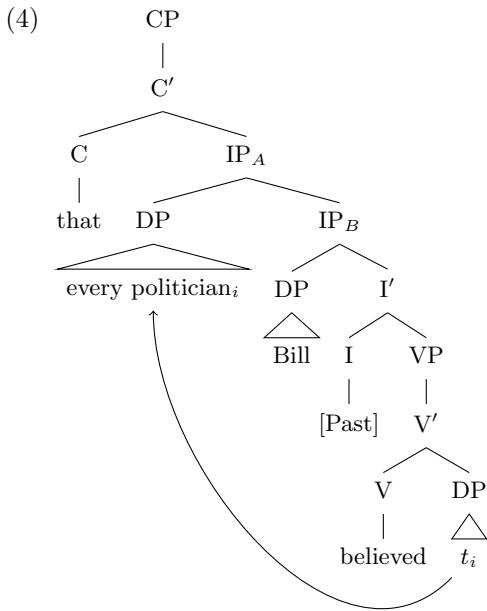
### 1.1

- (1) S 構造 :  $[_{CP} [_{IP} \text{Everyone left yesterday}]]$ .  
(2) LF 表示 :  $[_{CP} [_{IPA} \text{Everyone}_i [_{IPB} t_i \text{ left yesterday}]]]$



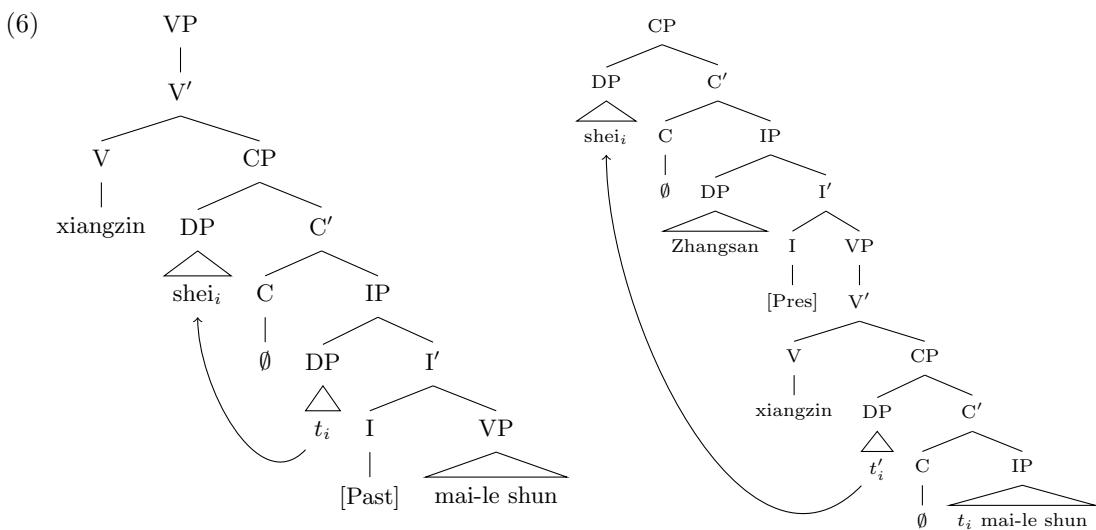
## 1.2

- (3) S 構造 :  $[\text{CP} [\text{IP} \text{ John said } [\text{CP} \text{ that } [\text{IP} \text{ Bill believed some politician}_i]]]]$ .  
(4) LF 表示 :  $[\text{CP} [\text{IP} \text{ John said } [\text{CP} \text{ that } [\text{IP}_A \text{ some politician}_i [\text{IP}_B \text{ Bill believed } t_i]]]]]$ .



## 1.3

- (5) S 構造 :  $[\text{CP} [\text{IP} \text{ Zhangsan xiangzin } [\text{CP} [\text{IP} \text{ shei}_i \text{ mai-le shu}]]]]?$   
(6) LF 表示 :  $[\text{CP} \text{ shei}_i [\text{IP} \text{ Zhangsan xiangzin } [\text{CP} t'_i [\text{IP} t_i \text{ mai-le shu}]]]]$



## 2 Exercise 2



不定冠詞の  $a(n)$  は *some* と同様に, 存在量化詞 (existential quantifier) として機能する. 作用域の曖昧性 (scope ambiguity) の議論を用いて, これを示せ<sup>a</sup>.

<sup>a</sup> pp.207-11 とあるのは誤植で, 正しくは pp.204-206 Scope ambiguity and QR を参照せよ

まず次の (1) を考える :

- (1) Every student likes a teacher.
- (2) S 構造 :  $[\text{CP} [\text{IP} \text{ every student } [\text{VP} \text{ likes a teacher}]]]$ .

この解釈は以下の 2 通りである :

- (3a)  $\forall x \in \{\text{生徒その } 1, \text{ 生徒その } 2, \dots\} \exists y \in \{\text{教員その } 1, \text{ 教員その } 2, \dots\} (x \text{ は } y \text{ が好き})$
- (4a)  $\exists y \in \{\text{教員その } 1, \text{ 教員その } 2, \dots\} \forall x \in \{\text{生徒その } 1, \text{ 生徒その } 2, \dots\} (x \text{ は } y \text{ が好き})$

(3a) は「生徒全員に好きな教員が存在する」, (4a) は「生徒全員に好かれている教員が存在する」ことに他ならず, LF はそれぞれ次の様になる :

- (3b)  $[\text{CP} [\text{IP}_A \text{ every student}_i [\text{IP}_B \text{ a teacher}_j [\text{IP}_C t_i [\text{VP} \text{ likes } t_j]]]]]$  (a teacher を先に繰り上げた場合)
- (4b)  $[\text{CP} [\text{IP}_A \text{ a teacher}_j [\text{IP}_B \text{ every student}_i [\text{IP}_C t_i [\text{VP} \text{ likes } t_j]]]]]$  (every student を先に繰り上げた場合)

また  $a(n)$  を主語位置に置いた,

- (5) A student likes every teacher.

においても 2 通りの解釈が可能で, QR の順番によって説明される. したがって  $a(n)$  は存在量化詞と言える.

### 3 Exercise 3



以下の文を考えよ：

1. Some student whispered that Bill read every book.
2. Some student believed that Bill read every book.

*some* と *every* の相対的な作用域としてあり得るものは何か。また、このデータはこれまでの議論に矛盾するか。

1 の解釈として、

(1a)  $\exists x \in \{\text{生徒その } 1, \text{ 生徒その } 2, \dots\} \forall y \in \{\text{本その } 1, \text{ 本その } 2, \dots\} (x \text{ は Bill が } y \text{ を読んだと噂した})$

があり得る。これは、「ある生徒が Bill は全ての本を読んだと噂した」ことを意味し、LF は次の様：

(1b) [<sub>IPA</sub> some student<sub>i</sub> [<sub>IPA</sub>  $t_i$  whispered that [<sub>IPB</sub> every book<sub>j</sub> [<sub>IPB</sub> Bill read  $t_j$ ]]]].

一方、2 の解釈として、

(2a)  $\exists x \in \{\text{生徒その } 1, \text{ 生徒その } 2, \dots\} \forall y \in \{\text{本その } 1, \text{ 本その } 2, \dots\} (x \text{ は Bill が } y \text{ を読んだと信じていた})$

(3a)  $\forall y \in \{\text{本その } 1, \text{ 本その } 2, \dots\} \exists x \in \{\text{生徒その } 1, \text{ 生徒その } 2, \dots\} (x \text{ は Bill が } y \text{ を読んだと信じていた})$

があり得る。(2a) は「ある生徒が Bill は全ての本を読んだと信じていた」、(3a) は「任意の本について、Bill がその本を読んだと信じていた生徒が存在する」ことに他ならず、LF はそれぞれ次の様になる：

(2b) [<sub>IPA</sub> some student<sub>i</sub> [<sub>IPA</sub>  $t_i$  believed that [<sub>IPB</sub> every book<sub>j</sub> [<sub>IPB</sub> Bill read  $t_j$ ]]]].

(3b) [<sub>IPA</sub> every book<sub>j</sub> [<sub>IPB</sub> some student<sub>i</sub> [<sub>IPC</sub>  $t_i$  believed that Bill read  $t_j$ ]]].

しかし、§7.2 Quantifier raising and Subjacencyにおいて、数量詞は最も近い IP に付加 (adjoin) し、それ以上遠くに移動できないことを見た。したがって、ここまで扱ってきた規則では、(3b) の派生を得ることはできず、矛盾が生じる。

## 4 Exercise 4

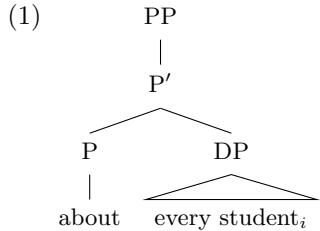


代名詞が束縛変項 (bound variable) として機能するためには、演算子 (operator) によって c 統御されなければならないという仮定のもとで、以下の文は QR (quantifier raising) の存在の証左となる。これを説明せよ。

1. A report card about every student<sub>i</sub> was sent to his<sub>i</sub> parents.
2. \*The woman who loved every man<sub>i</sub> decided to leave him<sub>i</sub>.

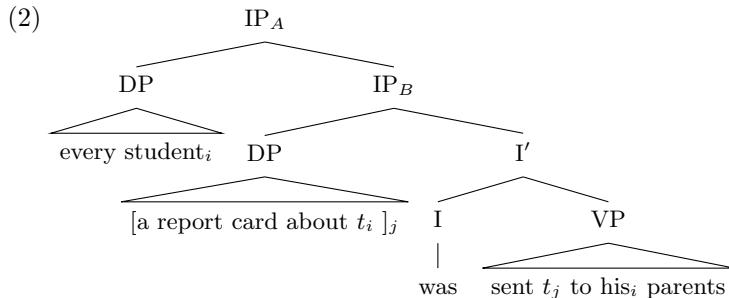
### 4.1

(1) S 構造 :  $[\text{CP} [\text{IP} [\text{DP} \text{ a report card about every student}_i]_j \text{ was sent } t_j \text{ to his}_i \text{ parents}]]$ .



1 では、his<sub>i</sub> が束縛変項として機能しているので、演算子である every student<sub>i</sub> に c 統御される必要がある。しかし、S 構造で DP-every student<sub>i</sub> が c 統御しているのは P-about のみである。そこで QR の存在を認めれば、LF は次の様になる：

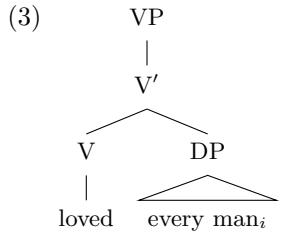
(2) LF 表示 :  $[\text{CP} [\text{IPA} \text{ every student}_i [\text{IPA} [\text{DP} \text{ a report card about } t_i]_j \text{ was sent } t_j \text{ to his}_i \text{ parents}]]]$ .



(2) ではたしかに every student<sub>i</sub> が his<sub>i</sub> を c 統御しており、問題の仮定を満たす。

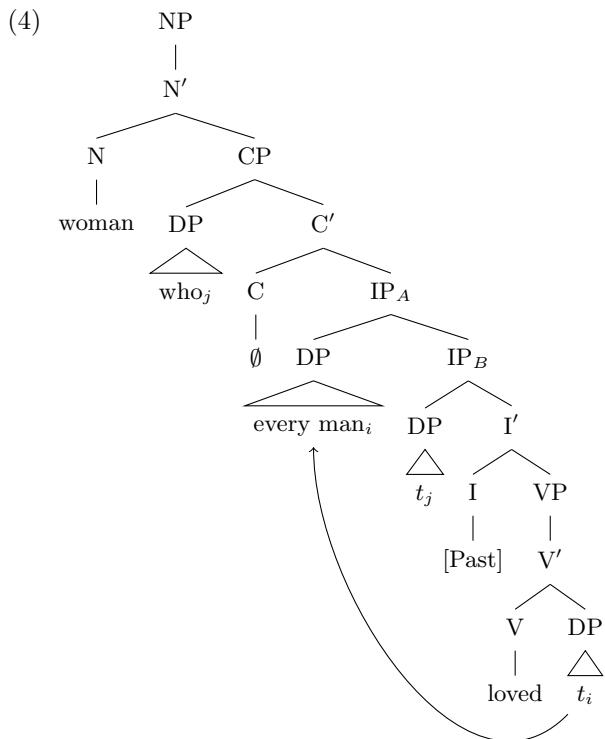
## 4.2

(3) S 構造 : \*[<sub>CP</sub> [<sub>IP</sub> [<sub>DP</sub> The woman [<sub>CP</sub> who<sub>j</sub> [<sub>IP</sub>  $t_j$  loved every man<sub>i</sub>]]] decided to leave him<sub>i</sub>]].



2 も every man<sub>i</sub> と him<sub>i</sub> が同一指標をもち、束縛変項の解釈を仕向けているが、S 構造において DP-every man<sub>i</sub> が c 統御するのは V-loved のみである。このとき QR の存在を認めれば、LF は次の様になる：

(4) LF 表示 : [<sub>CP</sub> [<sub>IP</sub> The [<sub>NP</sub> woman [<sub>CP</sub> who<sub>j</sub> [<sub>IPA</sub> every man<sub>i</sub> [<sub>IPB</sub>  $t_j$  loved  $t_i$ ]]] decided to leave him<sub>i</sub>]].



(4) に見られるように、every man<sub>i</sub> は最も近い IP に付加するので、LF においても明らかに him<sub>i</sub> を c 統御しない。したがって、非文であることが正しく予測される。以上の議論から、QR の存在の妥当性が言えた。

## 5 Exercise 5



§7.3において、虚辞 *there* は LF で連合要素 (associate) に置き換えられると仮定した。そのため、1 は LF では 2 のように表示される：

1. There is a man in the room.
2. A man<sub>i</sub> is *t<sub>i</sub>* in the room.

次の文はこの仮定に矛盾する。どのような問題があるか説明せよ。

3. There weren't many books on the shelf.
4. Many books weren't on the shelf.

3 は「本棚にはあまり本がなかった」、4 は「多くの本が本棚になかった」ことを意味する。すなわち、3 は本の全体量が少ない、例えば 3 冊しかないような状況を指すが、4 は極端な例を挙げれば、本が  $10^{10}$  冊ある一方で、探している本は 1 冊しかないような状況を指す。さて、虚辞は LF で連合要素に置き換えられると仮定したので、3 の文の LF は次の様である：

LF 表示： many books<sub>i</sub> weren't *t<sub>i</sub>* on the shelf.

これは 4 に他ならない。このときうえの議論から、3 は S 構造と LF で意味が変わってしまうことになる。

## 6 Exercise 6



§7.3 では、主語と定型動詞の一致 (subject-verb agreement) が、D 構造でなく LF で満たされなければならないことを見た。これは 1 のような文を説明するためであった：

1. There were six people in the office.

このように、束縛原理 (Binding Theory) が満たさるべき表示レベルも LF に修正する必要はあるか。以下のような例を用いて説明せよ。

2. John<sub>i</sub> bought every picture of himself<sub>i</sub>
3. \*He<sub>i</sub> liked every picture that John<sub>i</sub> took.

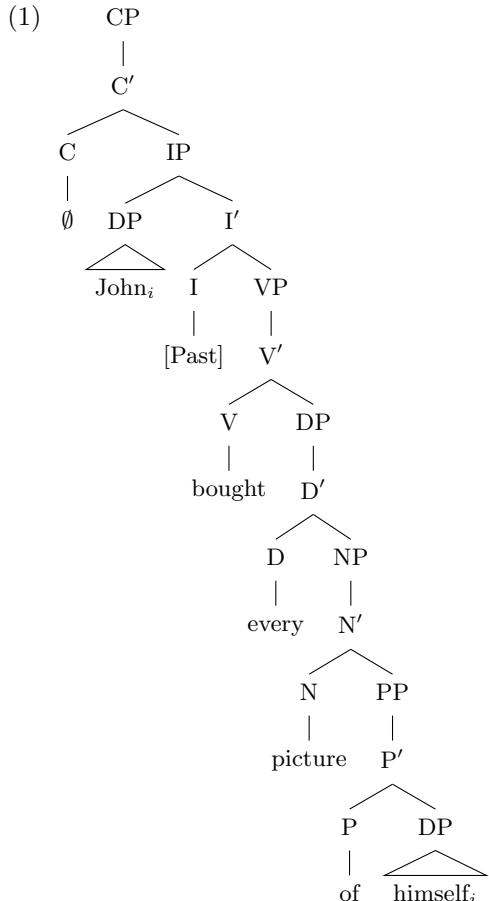
ここまで議論で得た結論は、次の文に説明を与えるか。

4. Which claim that John<sub>i</sub> made did he<sub>i</sub> deny?

## 6.2

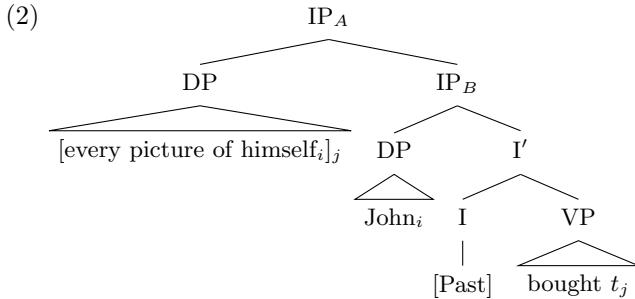
$\text{John}_i$  は指示表現 (R-expression) なので束縛原理 (binding principle) (C) が適用され, A 自由 (A-free) でなければならない. 他方,  $\text{himself}_i$  は照応形 (anaphor) なので, 束縛原理 (A) が適用され, その統率範疇 (governing category) の内部で, A 位置の要素に束縛 (bind) されなければならない.

(1) S 構造 :  $[\text{CP} [\text{IP} \text{ John}_i \text{ bought } [\text{DP} \text{ every picture of } \text{himself}_i]]]$ .



S 構造においては,もちろん束縛原理を満たす. 実際,  $\text{John}_i$  の先行詞が存在せず,  $\text{himself}_i$  の統率範疇は主節の IP であり ( $: \text{DP}-\text{himself}_i$ , 統率子 (governor) P-of, 接近可能な拡大主語 (accessible SUBJECT) DP- $\text{John}_i$  を含む最小の XP である), その中で  $\text{John}_i$  に束縛される.

(2) LF 表示 :  $[_{\text{CP}} [_{\text{IP}_A} [_{\text{DP}} \text{every picture of himself}_i]_j [_{\text{IP}_B} \text{John}_i \text{ bought } t_j]]]$ .

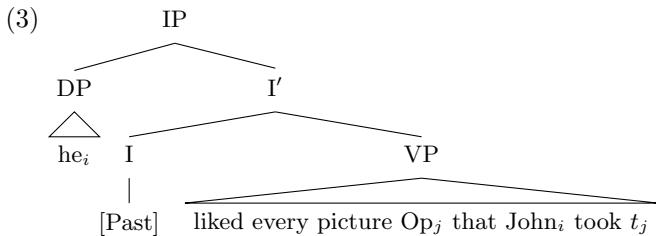


しかし LFにおいては、明らかに  $\text{himself}_i$  が  $\text{John}_i$  に c 統御されないので、束縛原理 (C) に違反する。

### 6.3

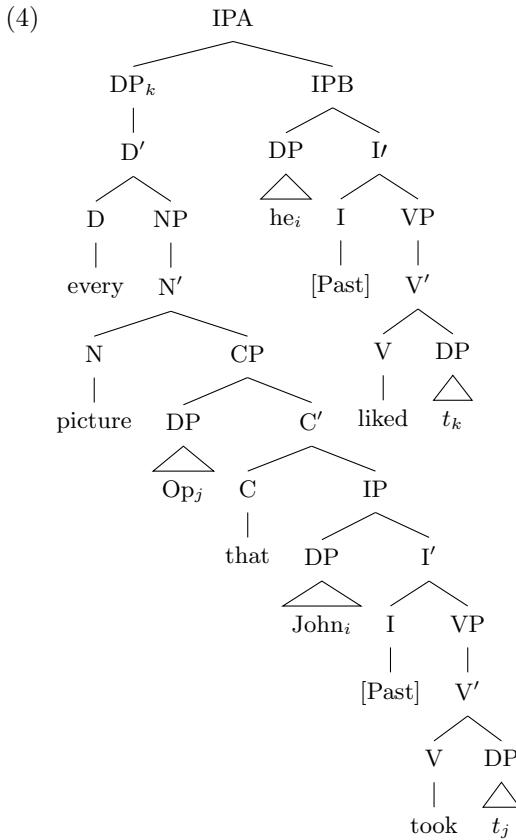
$\text{he}_i$  は代名詞なので束縛原理 (B) が適用され、その統率範疇の内部で A 自由でなければならない。 $\text{John}_i$  は指示表現なので束縛原理 (C) が適用され、A 自由でなければならない。

(3) S 構造 :  $*[_{\text{CP}} [_{\text{IP}} \text{he}_i \text{ liked } [_{\text{DP}} \text{every picture } [_{\text{CP}} \text{Op}_j \text{ that } \text{John}_i \text{ took } t_j]]]$ .



S 構造において束縛原理に違反する。実際、A 位置にある  $\text{he}_i$  が  $\text{John}_i$  を束縛し、 $\text{John}_i$  は A 自由でない。

(4) LF 表示 : [tiny CP [<sub>IPA</sub> [<sub>DP</sub> every picture Op<sub>j</sub> that John<sub>i</sub> took t<sub>j</sub>]<sub>k</sub> [<sub>IPB</sub> he<sub>i</sub> liked t<sub>k</sub>]]].



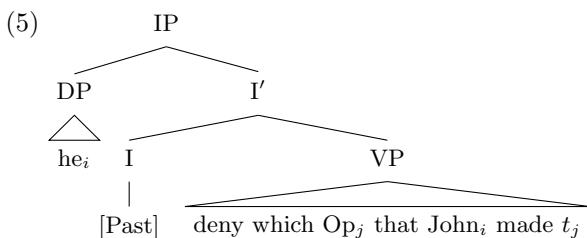
LFにおいて束縛原理を満たす。実際, he<sub>i</sub>, John<sub>i</sub> は互いに c 統御せず, すなわちともに A 自由である。

以上の議論から, LF で束縛原理を満たせばよいとすれば, 2 を非文予測し, 3 を正文予測してしまう。したがって, これまでと同様, S 構造で束縛原理を確かめればよい。

## 6.4

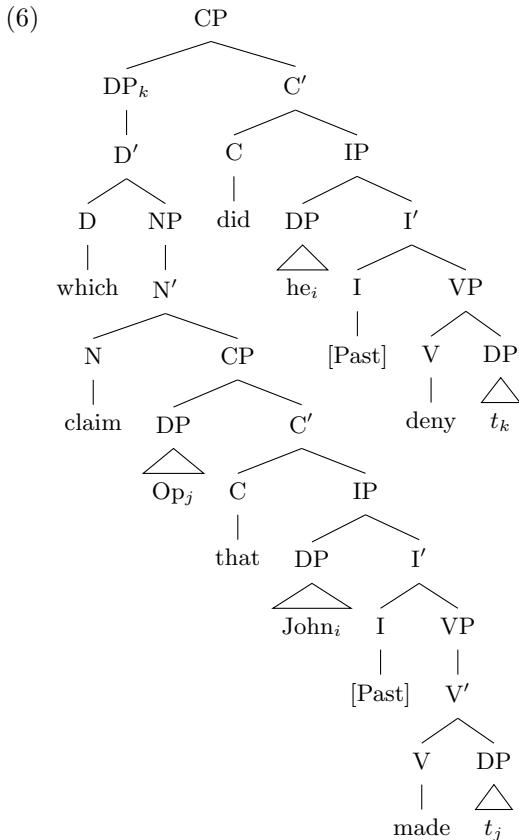
he<sub>i</sub> は代名詞なので束縛原理 (B) が適用され, その統率範疇の内部で A 自由でなければならない。John<sub>i</sub> は指示表現なので束縛原理 (C) が適用され, A 自由でなければならない。

(5) D 構造 : \*[<sub>CP</sub> [<sub>IP</sub> he<sub>i</sub> deny [<sub>DP</sub> which claim [<sub>CP</sub> Op<sub>j</sub> that John<sub>i</sub> made t<sub>j</sub>]]]].



D 構造において束縛原理に違反する。実際, A 位置にある he<sub>i</sub> が John<sub>i</sub> を束縛し, John<sub>i</sub> は A 自由でない。

(6) S 構造 : [CP [DP Which claim Op<sub>j</sub> that John<sub>i</sub> made t<sub>j</sub>]<sub>k</sub> did [IP he<sub>i</sub> deny t<sub>k</sub>]]



S 構造において束縛原理を満たす。実際, he<sub>i</sub>, John<sub>i</sub> は互いに c 統御せず, すなわちともに A 自由である。ここに (3) と (5), (4) と (6) の対応を見ることができる。よって, S 構造で束縛原理を満たすべきという結論が従う。